

びっこのお馬

小川未明

青空文庫

二郎は、ある日、外に立っていますと、びつこの馬が、重い荷を背中につけて、引かれ
ていくのでありました。

二郎は、その馬を見て、かわいそうに思いました。どんなに不自由だろう。そう思うと、
達者な馬は、威勢よく、はやく歩いていくのに、びつこの馬はそれに負けまいとして、
汗を流していっしようにけんめいに歩いているけれど、どうしてもおくれがちになるのであ
りました。

「このびつこめ、はやく歩け……。」「と、その馬を引いている親方は、ピシリ、ピシリ
とこの馬のしりを打つのでした。

二郎は、ぼんやりと立って、それを見送っていますと、やがて、往來をあちらの方へ
と、遠ざかっていったのであります。二郎は、まだ六つになったばかりでした。

家に入ってから、兄さんや、姉さんに、今日、あちらの道をかわいそうなびつこの馬が
通ったことを話しました。しかし、兄さんも、姉さんも、自分たちは、それを見なかつた
から、

「二郎ちゃんは、なにを見たんだか……。」「と、笑っていました。

二郎は、自分の見た、悲しい、哀れな馬について、よく兄や、姉にわからせたいと、いろいろにさせて、どもりながら、訴えましたけれど、相手にしてくれないので、

「そんなら、あしたの晩方、外に出ていてごらん、きつと、あの馬が通るだろうから……。」と、二郎は、兄さんや姉さんにいいました。

「ああ、通つたら、知らしておくれ。」と、兄さんや、姉さんは答えました。

二郎は、あくる日の晩方、友だちらが外に出て、鬼ごっこをしたり、独楽をまわしたりして遊んでいる時分に、独り、みんなから離れて、ぼんやりと往來の上立って、通る馬や、車をながめていました。また、昨日のびっこの馬が通るかと思つたからです。

二郎の立つている前を通る車や、馬は、黄色なほこりをたててゆきました。ほこりは、これらの馬や車がいってしまった後でも、なお空中にただよっていましたが、ついに昨日のびっこの馬は通りませんでした。

「二郎ちゃん、びっこの馬は通つた？」と、家に入ったときに、兄さんや、姉さんは、二郎に問いました。二郎は、さびしそうに頭を左右に振りまわしました。しかし、たとえ、今日、この道を通らなくとも、どこかの往來の上を、今日もまたあのびっこの馬は通るのであると、二郎は子供心ながらも想像されたのです。そして、そのいじらしい姿を思う

と、二郎は、哀れになつて涙ぐまれたのであります。

二郎は、自分の机のひきだしの中に、色紙と、はさみとを持っていました。彼は、それを取り出してきて、びつこの青い馬を切り抜いたのでした。

その紙の馬は、よくようすが、あのとき見た、びつこの馬に似ているように、自分に思われました。

彼は、その馬を立つように工夫しました。そして、それを机の上のせてみては、いろいろと空想にふけていたのであります。

「かわいそうな馬が、こうして、今日も、どこかの道の上を歩くであろう。」

こう、二郎は、紙の青い馬をながめて思っていました。あのとき見た馬は、青い馬ではなかつたのです。しかし、彼が紙の青い馬を見ているうちに、頭の中の馬も、いつしか青い色に変わってしまったのであります。

ちようど春で、ぼけの花の咲く時分でありました。兄は、どこからか、ぼけの植わっている鉢を持ってきました。いまその木には、真紅な花がもみつけたように盛りであります。兄は、それを庭先の石の上のせて、朝晩、水をやって、大事にしています。ある夜のこと、庭先でねこがたいへんにないて、けんかをしました。翌日、戸を開

けてみると、ぼけの枝が一本折れていました。それは、ねこがけんかをしたときに、さわつて折つたので、そこには、白い毛がたくさんに落ちていました。これを見たとき、驚いたのは、兄さんばかりではありません。姉さんも、また二郎もたいそう驚いたのです。しかし、その中でも、兄は、いちばん悲しみました。

「どうしたら、また、もとのような枝ぶりになるだろう？」と、兄さんはいつて、ねこをうらんだのであります。

このとき、ちょうど、叔父さんがおいでになりました。そして、兄の悲しんでいるそばへやってこられて、

「そんなに、悲しまなくたっていい。雨の降る日に、外へ出してやれば、じきに、折れたところから新しい芽をふくから。」と、叔父さんは申されました。

兄は、これを聞くとたいそう喜びました。そして、雨の降る日に、兄は、ぼけの鉢を外に出してやりました。

二郎は、兄さんのすることを黙って、よく見ていました。折れた枝も雨に当たれば、芽をふくというから、びっこの馬も、雨に当たったら、きっと足が伸びるだろうと、考えたのであります。

天気てんきの曇くもつた日ひのことでありました。二郎じろうは、姉ねえさんに、紙かみの青あおい馬うまを渡わたして、

「姉ねえさん、どうかこの馬うまを二階かいの屋根やねの上うえに出だしておいてください。」といいました。

「なぜ、二郎じろうちゃんはそのんことをするの？」と、姉ねえさんは不思議ふしぎがりました。脊せの低ひくい二郎じろうには、自分じぶん独ひとりでは、それを窓まどの外そとに出だすことができなかつたのです。

「いいから、出だしておくれよ。」と、二郎じろうは頼たのみました。

「いまじきに雨あめが降ふつてきますよ。すると、お馬うまがぬれてしまいますよ。」と、姉ねえさんはいいました。

「雨あめに当あつたら、お馬うまの足あしが伸のびるだろう。」と、二郎じろうがいいましたので、姉ねえさんも、この話はなしを聞きいていた兄にいさんも、また、家うちじゆうの人ひとがみんなで笑わらいました。

「ああ、伸のびますよ。」と、姉ねえさんはいつて、また笑わらわれました。

みんなは、二郎じろうが、ぼけの枝えだに芽めをふくから、お馬うまの足あしも伸のびるだろうと思おもっているのを、無理むりに打うち消けすのをかわいそうに思おもつたからです。

「じゃ、出だしておいてあげようね。」と、姉ねえさんは、二郎じろうの造つくつたびつこの馬うまを二階かいの屋や根ねの上うえにのせておきました。

そのうちに、雨あめが降ふつてきました。雨あめは、庭にわ先さきのぼけの花はなに当あたると、紅あかい花はな片びらが

雨に打たれてばらばらと、とれて落ちました。また、雨は二階の屋根に出ていた紙の青い馬にあたりました。するとまもなく、紙の馬はびつしよりとぬれてしまいました。

一晩、雨は降りつづきました。夜が明けると、二郎は、まず起きて、庭先のぼけの折れたところに、芽がふいたかと思えました。しかし、そこはただ白くなって、昨日のままでありました。

「兄さんのぼけは、まだ芽を出さないが、僕のお馬は、足が伸びたろうか？」と、二郎は思いました。

そして、さつそく、二階へ上がって行って、窓ぎわに立ちましたけれど、脊が低くて、二郎は、屋根の上をのぞくことができませんでした。

「姉さん、僕のお馬の足はどうなった？ 見さしておくれよ。」と、二郎は、姉さんに抱いて見せてくれるように頼みました。

姉さんは、窓のところへきてのぞいてみますと、青いお馬は、雨に打たれて、紙の青い色はみんなとれてしまつて、いまは汚らしく、見る影もなくなっているのです。姉は、こんな姿を二郎に見せたくありませんでしたから、

「二郎ちゃん、お馬は、いま雨にぬれて、ねんねしているのよ。足は、伸びかけています

の。「と良かったです。

「どれ、僕に見さしておくれ……。」と、二郎は、足踏みをして頼みました。

「いいえ、いまだれも見ないほうがいいのよ。お馬は、見られるのがいやだといっていますよ。」と、姉さんはいいました。

二郎は、我慢をして、もうすこしの間、見ないことにしました。その日の午後から、雨が晴れて、青い空があらわれたのであります。風はさやさやと新緑の葉の上を渡っていました。それは、心地のいい景色であります。

「姉さん、僕のお馬を見せておくれよ。」と、二郎は、また姉に頼みました。

姉は、二階に上がってきました。あとから二郎がついてきました。しかし、姉が窓からのぞいてみると、紙のお馬はいつのまにか乾いて、風に吹かれて飛んで、あちらの屋根のといにかかっています。

「姉さん、どうなった？」ときいている弟に対して、姉は、ありのままに知らせる気にはなれませんでした。

「二郎ちゃん、お馬は足がなおったものだから、元気よくどこかへ駆け出してしまいましたよ。」と答えました。

二郎は、いつか、みんなから遅れて、汗を流して歩いていったびっこの馬を思い出しました。また、同時に、足早に歩いていった健康な馬の姿を思い出しました。

びっこの馬が、足がなおつて、元気よくどこかへいったということは、どんなに二郎に、うれしいことであつたでしょう。

雨のために足が伸びて、馬が、どこかへ行ってしまったことを、二郎は、ほんとうだと思いました。

(この哀れな少年年は、大きくなつたら、すべてを知るでしょう。)

その夜は、いい月夜でした。二郎は、田圃の中の真っ白に花の咲いた、あんずの木の下に立っていますと、あちらの往來を青いお馬が、月の光に照らされて歩いていくのを、ありありと見ました。そのことを姉さんに話すと、姉さんは、そのときは笑わずに、泣いていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1922（大正11）年5月

※表題は底本では、「びっこのお馬《うま》」となっています。

※初出時の表題は「跛のお馬」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

びっこのお馬

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>